

増補下学集の増補について

——草木門を中心に——

岩 野 靖 則

一

『増補下学集』は、寛文九年（一六六九）に山脇道円が『下学集』に増補を施したものである。元になった『下学集』は、元和三年（一六一七）に刊行された元和本『下学集』か、それにかなり近い別の『下学集』であると言われる⁽¹⁾。

『増補下学集』は、まず元の『下学集』に収録されている語を挙げ、その後「増補」と明記して、増補した語を収めている。増補した語は非増補の語の約五倍にも及んでいる。最も増補語数の多いのは「態芸門」である。その次は「器財門」であり、その次が「草木門」である。「態芸門」については、すでに杉本つとむ氏によって詳しく述べられており⁽²⁾、「器財門」に関しても先行する論考⁽³⁾があるので、本稿では特に「草木門」を取り扱うことにする。

非増補の部もやはり『増補下学集』の中に含まれ、研究対象となるべきである。しかし本稿においては、とりあえず増補部に限って考察を進めてゆきたい。どのような語が増補されているかということに興味があるからである。そ

して『増補下学集』がどのような実用性をもっていたかについても少し触れてみたい。後でも述べることだが、ものを書いていて字を思い出せないときに引くための辞書なら、平安時代の『和名抄』から増補語彙を仰いだりするだろうかという疑問も感じるのである。

本稿では、語形を中心に典拠になった辞書との差異を考えてゆくことにするが、清濁については曖昧なところが多いので、特に取り上げることをしないつもりである。また、計量的な調査も必要であるが、ここではなるべく一語一語について見てゆくことにしたい。

二

「草木門」の増補の部は、語の配列を見ると、明らかに前半部分と後半部分とが異なっていることが分かる。前半部分は、『和名抄』と非常に密接な関係があり、また、後半部分はイロハ順に並んでおり、『節用集』を典拠にしているらしい。このことは、すでに杉本つとむ氏によって指摘されている⁽⁴⁾。

さて、その前半部分も前後二つの部分から成っている。具体的に言うると、最初の「芒穂^{ノキ}」(四一九・四)⁽⁵⁾から「羊蹄菜^{シラフクサ}」(四二〇・八)までが第一部分。次の「苳^{サネクサ}」(四二〇・八)から「蓴^{ハナサ}」(四二五・八)までが第二部分である。第一部分は、二十卷本『和名抄』の巻十七を典拠にしていると見られる。第二部分は巻二十を踏まえているようである。

この『和名抄』巻十七の内容は次のようになっている。

稻穀部——稻類 米類 麥類 (粟類) 豆類 麻類

菓部——菓類（菓具）（芋類）

菜蔬部——（葷菜類）海菜類 水菜類 園菜類 野菜類

このうち、括弧で包んだものは、一語も採られていない「類」である。ただし、非増補の部にすでに挙げられている語はある。実例を示すと、「粟類」の「粟」（和名阿波）。「菓具」の「核」（和名佐禰）。「蔬類」の「冬瓜」（和名加毛字利[㊤]）、「胡瓜」（和名曾波字里、俗云木字利）、「茄子」（和名奈須比）、「荀子」（和名阿介比[㊤]）、「菱子」（和名比之[㊤]）、「覆盆子」（和名以知古）。「芋類」の「零餘子」（和名沼加古）、「薺」（和名土古呂）、「烏芋」（和名久和井[㊤]）。「葷菜類」の「菜蔬」（和名久佐非良[㊤]）、「烏蒜」（阿佐豆木[㊤]）。

一方、『和名抄』卷二十の内容は次のとおりである。

草木部——草類 苔類 蓮類 葛類 竹類 竹具 木類 木具

そしてこれらのすべての「類」から、増補の語が採られている。しかも、ほとんどの語が、配列もそのまま、増補部に収められている。すなわちこの第二部分は、第一部分よりも、『和名抄』と重なる箇所が多いのである。『増補下学集』の編者は、「草木門」増補のために、まず『和名抄』の「草木部」を典拠としたのであろう。そしてそれを補うべく、「稻穀部」「菓部」「菜蔬部」にも拠ったという可能性がある。

ただしこの第二部分も、卷二十のすべての語を収めているわけではない。やはり第一部分と同様に、すでに非増補の部に入っている語や、典拠の『和名抄』のほうに「和名」が記されていない語は除かれている。それ以外で増補に採られていない語は、さほど多くはない。

またこの増補部は、平安時代前期に成る『和名抄』の語を、そのままの形で再録しているのではない。語形等の異なっているものもいくつかあるので、実例を挙げてみる。まず、第一部分では次の五例である。

芒穂ノギボ (四一九・4) 穀イヅノタチモノ (四一九・5) 糙モミノヨネ (四一九・5) 於期菜ヲコノリ (四二〇・2) 茶ヲホトチ (四二〇・6)

「芒穂」は『増補下学集』では一語のように表わされている。しかし、典故の『和名抄』では「稻」の項の註文中に、

芒 音興亡同 和名乃木 (一ウ)

穂 音遂、和名保 (同)

のように別々に記されている。時代が下っても、例えば邦訳『日葡辞書』には、

Nogu. (麦や米などのぎ。)

Ho. (麦その他の穀物や草の穂。)

とあって、「芒」と「穂」とは元来別の物である。「増補」編者の錯誤であろうか。

「穀」は、『和名抄』には「音谷、和名毛美、日本紀私記云五穀以都々乃太奈豆毛乃」という割註がある。これによると、イツ、ノタナツモノでなければならぬのが、「増補」ではイツ、ノタチモノ側と記されている。イツ、ノタナツモノとは「五つの種子つ物」のことであるが、イツ、ノタチモノでは意味が不明である。「増補」編集の頃には、タナツモノという古代語の意味が理解しにくかったためであろう。

「糙」は、『和名抄』では「音興造同、漢語抄云毛美興禰、一云加知之禰」と割註にある。したがって、モミヨネ、カチシネと読むことになるが、「増補」ではモミノヨネ・カモヨネという仮名が振ってある。カチシネは、

糙 音造 モミヨネ 一云カチシネ ソ、ル △名義抄・法下・三六▽

糙米サツ モミヨネ 又カチシネ △前田本色葉字類抄・毛・飲食▽

のように、他の辞書にも記されている。これもやはり「増補」編者の錯誤か。

「於期菜」は、『和名抄』に「和名」が示されていないが、「増補」ではヲコノリと読んでいる。

「茶」は、『和名抄』では「音途、和名於保都知」という割註があるので、オホツチであるが、「増補」ではヲホトチとなっている。しかしオホトチという語形も古くから存在する。例を挙げると、

茶 音途 オホトチ (下略)

△名義抄・僧上・八▽

榛^ダ ヲホトチ 茶^ト 同 苦菜也可食也

△黒川本色葉字類抄・於・植物▽

茶^ト オホトチ ニカナ トチ

△倭玉篇・中・草▽

茶^ト オホトチ

△易林木節用集・於・草木▽

などである。さきの「於期菜」とこの「茶」を見ると、「増補」編者は『和名抄』以外の資料にも目を通している可能性がある。

さて、第二部分において特徴的なのは、語の音読みを振り仮名で記していることである。

カハロモモキ 菊 (四二一・一)	アリノヒキ 桔梗 (四二一・一)	フカミクサ 牡丹 (四二一・二)	ヤマスケ 麥門冬 (四二一・二)	エヒスクスリ 芍薬 (四二一・三)
スマロクサ 天門冬 (四二一・三)	アマキ 甘岬 (四二一・四)	カクマクサ 黄連 (四二一・四)	カノニゲクサ 人參 (四二一・四)	ハ、ク 貝母 (四二一・三)
ケンモンノウ 忍冬 (四二四・三)	カンサウ 忍冬 (四二四・三)	ワウレン 忍冬 (四二四・三)	ニンシン 忍冬 (四二四・三)	

みぎのように、左側の振り仮名でその語の字音を示しているが、これは『和名抄』にはないものである。これらの語は、「増補」編集の当時、右側の振り仮名で示した呼称はすでに古語となり、別の資料によって左側の振り仮名を補い、一般的な呼称を示したのであろう。その別の資料とは、あるいは易林本『節用集』であるのかも知れない。この『節用集』には、「ニンシン(人參)」のほかは、「キク(菊)」から「ニンドウ(忍冬)」まですべて収められて

いる。

このほかに、『和名抄』との差異が認められるものは、次の十八例である。

龍膽ニギハヤシ (四二・一) 蘭茹ヲアサミ (四二・七) 石葦イハノカハ (四二・三) 青箱ウマクサ (四二・五) 牛膝イノコウヂ (四三・一)

白英ホシシ (四三・二) 白蒿シロモモキ (四三・四) 王孫スハリクサ (四三・六) 楳サク (四四・五) 檉ムロノキ (四四・五)

合歡木ツクニノイヒネ (四四・七) 厚朴ホノ、カシノキ (四四・七) 茵芋オニツヅ (四四・八) 石檀トシリコノキ (四四・三) 五茄ムコキ (四五・三)

石楠トヒラフネ (四五・五) 蜀漆クサナムサ (四五・六) 楸ヤマトツキ (四五・七)

「龍膽」は、『和名抄』では「和名衣夜美久佐、一云逐加奈」とあるから、ニカナがニカハになっていることになる。また「蘭茹」は、『和名抄』では「閭如二音、和名禰阿佐美、一云仁比萬久佐」とある。ニヒマクサがニヒマクラになっているわけである。いずれも「増補」編者の錯誤であろう。

「石葦」は、『和名抄』では「和名以波乃加波、一云以波久美」とあるが、そのイハクミが「増補」ではイハ、クミとなっている。『増補下学集索引』にもイハ、クミで登録されている。しかし影印本をよく見ると、ハの字の下に「、」はおどり字のように見えるが、あるいは版木彫刻の際のミスなのかも知れない。この「、」はやや小さめに右へ寄っている。おどり字の「、」はもう少し太いのが普通のようなのである。

「青箱」は、『和名抄』では「私羊反、和名字末佐久、一云阿萬佐久」。すなわち、ウマサク・アマサクがウマクサ・アマクサとなっている。ただし、例えば、

青蒿 ウマクサ アマクサ

青箱 ウマクサ

△伊呂波字類抄・字・植物▽

のように、ウマクサ・アマクサという語形を挙げる辞書もある。

「牛膝」は、『和名抄』では「和名爲乃久豆知」であるから、イノクツチがイノコツチとなっている。しかし、イノコツチという語形も存在し、易林本『節用集』にも、

牛膝サノコツチ

(爲・草木)

と記されている。

「白蔘」は、『和名抄』では「和名保魯之、一云豆久美乃伊比禰」とあって、ホロシとツクミノイヒネである。まづホロシであるが、「増補」ではホソシとなっている。ただし十卷本『和名抄』は「保魯之」。ツクミノイヒネは「増補」ではツクニノイヒネとなっている。

「白蒿」は、『和名抄』に「和名之路與毛木、一云加波良與毛岐」と記されている。このカハラヨモキが、「増補」ではカハラヨ子キとなっている。「王孫」は『和名抄』に「和名沼波利久佐、此間云豆知波利」と記されている。このツチハリが、「増補」ではチハリとなっている。いずれも「増補」編者の錯誤であろうか。

「栂」は、『和名抄』では「音永、漢語抄云佐久木」とあるからサクキである。「増補」ではこれがサクと記されている。「榎」は、『和名抄』では「榎音勅貞反、和名無呂」とある。このムロが、「増補」ではムロノキとある。

「合歡木」は、『和名抄』に「和名禰布里乃木」とあるから、ネフリノキである。「増補」ではネムリノキとなっている。「厚朴」は、『和名抄』には「楊氏漢語抄云、厚木保々加之波乃木」「和名保々乃加波」と見える。このホ、ノカシハノキが、「増補」ではホノ、カシハノキと記されている。

「茵芋」は、『和名抄』には「因于二音、和名仁豆々之、一云乎加豆々之」とある。このニツ、シが、「増補」ではメニツ、ジとなっている。『増補下学集索引』にもメニツ、ジで登録されている。ところが、「メ」は片仮名のメで

ではなく、符号のノ（シテ）である。これは、前項の「羊躑躅」の語註が「羊誤食^{ヒツシヤマツテラヘハ}之^ヲ躑躅^{テキテヨクト}而死^ス故^ニ以^テ名^レ之^ニ」とあるべきところを、「躑躅而^{テキテヨクト}」の「ノ」が下の「茵芋」の振り仮名に混じってしまったものである。非増補の部にも、「躑躅華^{テキテヨク}」（四一六・六）の語註に「羊食^{ヒツシクラヘハノ}此華^ヲ躑躅而斃^{テキテヨクニゾ}矣^{タラ}」「躑躅折^{トゾ}膝^テ而欲^{ヒサ}飲^ス之^ノ」⁽⁴⁾などと記されている。これは版木製作上の不手際であろう。

「石檀」は『和名抄』では「和名止禰利古乃木、一云太無乃木」とある。このタムノキが、「増補」ではクムノキになっている。「五茄」は、『和名抄』には「和名無古木」と記されている。「増補」では、このムコキのほかにウコキも挙がっている。「石楠艸」は、『和名抄』では「楠音南、和名止比良乃木、俗云佐久奈無佐」とある。このサクナムサは和名とするされているが、「石楠草」の字音シャクナンサウのことであろう。これが「増補」ではクサナムサと書かれている⁽⁴⁾。「蜀漆」は、『和名抄』に「和名久佐木、一云夜末宇豆木乃禰」とある。このヤマウツキノネが、「増補」ではヤマウツキノとなつている。「楔」は、『和名抄』では「音奥、漢語抄云禰須三毛知乃木」と記されているので、ネスミモチノキである。「増補」ではネスミモチノキとなつている。

以上、「増補」前半部分とその典拠となつた『和名抄』との差異を見てきた。これらの中には、編集者や版木製作者の思い違い・ミスと思われるものもあつた。また、平安時代前期の『和名抄』所収の語がすでに古語となり、「増補」編集の当時にはわかりにくくなつていて、そのために生じた手違いもあつたようである。しかしその古くなつてわかりにくい語に対して、『和名抄』以外の辞書、もっと新しい資料などによって補おうとしたことも考えられたのである。

三

この節では、増補部の後半部分に関して、典拠になったと思われる易林本『節用集』との関係等を考察することにした。

前節で述べた増補前半部分と『和名抄』との関係は、特に語の配列においてはかなり密接であった。この後半部分についても、「増補」編者は「易林本」を大いに参照したであろうことは疑いない。しかし語の配列は、イロハ順になっているものの、「易林本」と「増補」とではほとんど一致しない。そればかりか、「易林本」にない語も、「増補」には少なからず収められている。

まず、それらの語を列挙してみる。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|---|-----|-----|-----|-----|
| (イ) | 一八 | 連翹 | 刺棘 | 義同 | 菱 | 敢 | 穰栗 | 笏 | 伊吹木 |
| (ハ) | 廿日艸 | 薑 | 班竹 | 馬先蒿 | 檜 | 白頂花 | 馬白樹 | 忘憂艸 | |
| (ホ) | 寶珠華 | 寶懂華 | | | | | | | |
| (ト) | 芋 | | | | | | | | |
| (チ) | 地骨皮 | | | | | | | | |
| (リ) | 綸旨梅 | 良姜 | 拾栢 | 利根艸 | | | | | |
| (ヲ) | 芍藥 | 榛 | 玄參 | | | | | | |
| (ケ) | 櫻 | 我毛香 | 黃壁 | | | | | | |

(ミ) (ニ) (ホ) (サ) (ア) (エ) (コ) (ケ) (マ) (ク) (ノ) (ウ) (ム) (ソ) (レ) (タ) (ニ) (カ)

木路 ミツフキ	夕顔 ユウガン	金銀花 キンギンカ	山茶花 サンザクラ	鳴秋 アサツキ	紫葛 エヒカヅラ	心太 ココロト	下馬三禮 ゲマサンレイ	松茸 マツタケ	菜莢 ダイミ	茺朮 クハイク	凌霄花 ノウゼンカズラ	榎 ウネ	葦 アシ	蘇鉄 ソテツ	靈芝 レイシ	武田菱 タケタヒシ	葭 ヤ	麒麟 キリン	括蕒 カクダ	胡櫛 カラハジカミ	唐瓜 カラウリ	雁足 カンソク	莪 カンヒ	荷花 カクワ	骨逢 カウホ子	紙麻 カラムシ	紙苧 カヌ	金錢 カラナデシコ	含緋 カンヒ	柰 カラナシ	答竹 カントク
		金徽花 キンギンカ	澤百合 サユリ	阿古陀 アコタ		牛房 ゴボウ	華鬘 ケマンサウ	蔓珠沙花 マンジュシャケ	曼珠沙花 マンジュシャケ	殘艸 クハニサウ	野苳 ノマダ	野菊 ノキク				葦蓉 タケバコ															
		錢朝露 センチャロウ	小角豆 サカマメ				兼葭 ケンカ	化蓼 ケタテ																							
		牛舌草 ギウセツサウ					懸空艸 ケンクウサウ																								

増補下学集の増補について

増補下学集の増補について

- | | | | | | | | | | |
|-----|------------------------|----------------------------|---------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|---------------------------|--------------------------|-----------------------|
| (シ) | 塩苔 <small>シホノリ</small> | 白瓜 <small>シロフウ</small> | 芝 <small>シバ</small> | 蓬 <small>シノ子</small> | 笈 <small>シモト</small> | 者莪 <small>シヤガ</small> | 秋冥菊 <small>シウメイキク</small> | 七重花 <small>シチウワカ</small> | 白藻 <small>シラモ</small> |
| (モ) | 粳 <small>モミ</small> | | | | | | | | |
| (セ) | 雪柳 <small>セツリウ</small> | | | | | | | | |
| (ス) | 杉葉 <small>スギナ</small> | 隨香花 <small>ズイキヤウクラ</small> | | | | | | | |

以上が、「易林本」には入っていない語である。このほかにも、細かく見ると、「易林本」ではただ語だけを挙げているのが、「増補」ではそれに語註が補われているものもある。例えば、「増補」における「海棠」(四二八・三)には、「杜子美母名棠也 故詩中不言海棠」という割註がある。「易林本」ではただ「海棠」とだけ記されていて、割註はない。また、ほかには、次のようなものもある。「易林本」では「犬荏」とだけあるのを、「増補」では「犬荏 氷蘇上」(四二六・一)のごとく、「氷蘇」が補われている。

また、読みが同じで漢字表記の異なるもの、反対に漢字表記が同じで読みの異なるものもある。前者の例としては、「増補」における「荊易」(四二八・三)が、「易林本」では「刈安」となっているなど。後者の例としては、「増補」の「櫨」(四二六・六)が、「易林本」では「櫨」となっているなどである。

さきに列挙したもので、語頭音の異なる語の混入している例がある。(ウ)の語群の中に「櫨」(四二八・二)が入り、(オ)の語群の中に「錢朝露艸」(四三三・三)が混っている。オウチは、ワウチのつもりであったのだろうか。いずれも編「錢朝露艸」は、前々項や前項の「金銀花」「金徽花」との関係からこの位置に入れられたのだろうか。いずれも編集の際の手落ちであろう。

以上のごとく、語の配列・語の出入り・語形・漢字表記などの点で、この「増補」後半部分は、典拠になったと思われる「易林本」とは一致しない部分も多く、かなり編集の手が加わっているようである。

もう一つ、これに関連して述べると、語の配列はイロハ順になっているが、イ・エ・オとヰ・エ・ヲの取扱いにも差異がある。「易林本」では、「伊」「江」「於」と「爲」「惠」「遠」との区別を一応はしている。「増補」では、これをイ・エ・ヲに統一する傾向がある。

例えば「増補」における「澤瀉」(四二七・七)「蕙」(四二七・七)「白頭艸」(四二七・八)は、「易林本」では「於」の中に収められているものである。また、「増補」では、語頭音「ヨ」の語群の次は「エ」ではなく「エ」になっている。そして、ここでは「易林本」の「江」と「惠」の両方に属する語がまとめて掲げられている。すなわち、仮名遣いは「エ」に一括し、記載する場所は「エ」の来るべき箇所に置かれていることになる。このように「易林本」を典拠と仰ぎながらも、「増補」独自の編集が成されているのである。

さて、「易林本」には見当らない語が少なからず加えられていることを初めに述べた。では、これらの語はどの資料によったものであろうか。

「増補」前半部分にはなく、イロハ順になっている後半部分に入れたのであるから、やはりイロハ引きの辞書を参照した可能性はある。ことによると、易林本以外の元になる『節用集』を用いたのかも知れない。登録されている語や、その配列、語形、表記なども、易林本よりもっと「増補」に近い『節用集』があるのかも知れない。それは今後さらに調査すべき問題である。

しかし「増補」は、不完全ながらも、前述したようにそれなりに編集されている。したがって、イロハ引きの辞書でなくとも、何か本草類を参考にしたことも考えられる。または、往来物との関係も、これから調べてゆく必要があろう。

最後に、「草木門」増補部の編集順序について触れておきたい。本稿では、増補部が前半部分と後半部分から成る

と述べた。しかし、増補が二次に行なわれたとは考えなかった。

前半部分の典拠となった『和名抄』からすべての語が「増補」に収録されたわけではない。その収録されていない語の中には、すでに非増補の部に入っているものもあれば、後半部分に入っているものもある。後半部分に入っているものには、「蒲」(四二九・1)「蛇床子」(四三三・3)などの語がある。すると後半部分が第一次の増補で、前半部分が第二の増補であり、すでに一次で採った語は、二次の増補の際に除いたと見られる。

しかしながら、後半部分の典拠となった「易林本」からも、すべての語が「増補」に収録されたわけではない。その収録されていない語の中には、やはりすでに非増補の部に入っているものもあれば、前半部分に入っているものもある。前半部分に入っているものには、「葒艸」(四二三・7)「寄生」(四二五・7)「糠」(四一九・5)などの語がある。すると前半部分ですでに採った語は、後半部分の増補の際に除いたということになってしまう。

ということは、前半部分も後半部分もほとんど同時に成ったものか、あるいは、それができた後に、編者が増補部全体を整えるために手を入れたことが推測される。また前半部分で、『和名抄』から採った語に「易林本」を参考にして字音を補っているところがあったのも、このことからうなずけるのである。

四

以上、『増補下学集』『草木門』の増補部とその典拠との関係を、特にその差異に注目しつつ述べてきた。「増補」の編集は、一見、整備されていなく、用意のなさも目につくようである。しかし、それでも意外に編集の手が加わっていて、増補部全体を整えようとした跡も見られるのである。

全体を整備するならば、増補部すべてをイロハ順の配列にすることも考えられたはずである。もっとも、『下学集』はイロハ引きの辞書ではなく、『増補下学集』の非増補の部もイロハ順になっていないが、イロハ順の配列のほうが辞書としては使いやすい。分類基準・配列が曖昧では引きにくいのである。

『下学集』の「序」には「文字者貫道之器也。無器而能達此道豈夫然乎」と記されている。つまり言葉は学問の基礎だというのである。そして学問は『実語教』『童子教』や『長恨歌』『庭訓往来』などを教科書として学ぶのもよいが、これらは分量も多く複雑なので、初学者には手に負えない。そこで初学者のために、多方面に渡って記事を広く収録し、まとめたものがこの集であるとする。そして、初歩から倦まず弛まず学んで大成せよと言い、『下学集』と名づけている。すなわち『下学集』は学問を志す者のための参考書として作られたのである。

『増補下学集』の「叙」によると「憂下学集不詳審一拾撫濫崇而撰増補下学集」とある。これは『下学集』を充実させようとし、『下学集』と同一線上にあるものと見てよい。したがって、よく言われるように、ものを書いていてその漢字が思い出せない時に引くための辞書ではないのであろう。引くための辞書というよりも、読むための事典としての性質をもっていたであろうと推測される。

どのような階層の人間が、どのような文章を綴っていたのか、当時の言語生活をもっと詳細に調べなければならぬが、『増補下学集』に収録されている語の中には、必ずしも日常生活に必要であると考えられない語も入っている。

安田章氏によれば、中世の辞書は、おおむね一般の庶民のためのものではなく、知識階級のものであったという。イロハ引きの『節用集』ですら、知識層の連句連歌のためのものであったと述べておられる。

『下学集』は『節用集』に比して刊行されることが少なかった。これは、ものを書く際に文字を検索するものでは

なかったためであろう。『下学集』は知識人の知的興味を満足させるための、初学者の参考書としての性質をもつ、いわば百科事典のようなものであったのだろう。『節用集』と較べて語註が多いのも同じ理由からであると思われる。そうすると、当時すでに検索に便利なイロハ引きの節用集が出まわっていたにもかかわらず、『増補下学集』の増補がイロハ順の配列に徹することなく、一見して不用意な配列になっているのは、読むために、学習するために編集されたからである。

初学者は『増補下学集』を座右の書として、折りに触れてこれを開け読んだことであろう。註文にはほとんどすべて訓点を付してあり、『和名抄』の註文のように出典を示すことをめつたにしない。また文明本『節用集』などと較べれば、註文はかなり簡略なほうである。これは、初学者の便を考えてのことであろう。もっとも、『増補下学集』所収の語にはすべて註文が施されているわけではなく、演字表記を示しているだけのものもある。また施されている註文も概して簡略であるということから、文章を書く際に辞書として利用したことも考えられる。

このような問題も含め、さまざまな問題がまだ残されている。今後、「草木門」だけでなく、すべての「門」に渡って、詳細な考察を進めてゆきたい。「門」によって編集の方法が異なっているからである。

注(1) 参考文献④

(2) 同右

(3) 参考文献⑧

(4) 参考文献④

(5) (四一九・四)は、近世文学史研究の会『増補下学集 上巻・下巻』(昭四一・四三、文化書房博文社)におけるページ数・行数である。以下同じ。

- (6) 非増補の部では「鴨瓜」(四一三・三)という表記になっている。
 (7) 非増補の部では「通州」(四一〇・四)という表記になっている。
 (8) 非増補の部では「菱」(四一〇・四)という表記になっている。
 (9) 非増補の部では「蕁麻」(四二二・一)という表記になっている。
 (10) 非増補の部では「菌草ニ字ニ」(四三〇・四)とある。
 (11) 非増補の部では「蘭葱」(四二〇・二)とあり、また「増補」後半部分には「蘭葱鴨萩」(四三一・七)とある。
 (12) 近世文学史研究の会『増補下学集索引』(昭四六、文化書房博文社)には、イッメタチモノとして登録されている。しかし、影印本を見ると、片仮名の「メ」のように見えるのは、実は、おどりの字の「メ」と片仮名のノとがスペースの関係で重なってしまったものである。したがって、イッメタチモノではなくイッ、ノタチモノである。
 (13) 『増補下学集索引』には「テキヨクくわ*ツツジくわ」として挙げられているが、テキヨクではなく、テキチヨクである。
 (14) 『増補下学集索引』には「クサナムサウ」として登録されている。しかし『和名抄』にはサクナムサとあるところから、「増補」緒者もクサナムサのつもりであっただろう。クサナムサウのつもりで記したのではなかっただろうと考える。
 (15) 「増補」前半部分にも「連翹」(四二二・三)とあって重出である。
 (16) ほかに、(7)の中に「若和布」(四二八・一)があるが、こはワカメの誤刻であろう。
 (17) このことは「増補」前半部分に関しても言えることである。
 (18) 参考文献⑨

〔主な参考文献〕

- ① 亀田次郎「刊本下学集について」(『立命館文学』昭一〇・四)
 ② 岡田希雄「元和版下学集攷」(『立命館文学』昭一三・六)
 ③ 川瀬一馬『古辞書の研究』(昭三〇、講談社)

増補下学集の増補について

- ④ 杉本つとむ『増補下学集』に関する一考察（『中村俊定先生古稀記念 近世文学論叢』昭四五、桜楓社）
- ⑤ 林 義雄『増補下学集の増補部分について（1）『天地門第一』（『松学舎大学論集』昭四七・3）
- ⑥ 林 義雄『増補下学集』の増補語彙について イロハ分類部分の考察を中心に（『言語と文芸』81、昭五〇・10）
- ⑦ 杉本つとむ『増補下学集』の構成と語彙 辞典編集の方法をさぐる（『杉本つとむ日本語講座』3、昭五四、桜楓社）
- ⑧ 平橋芳子『増補下学集の増補語彙について 器財門を資料として』（『文教大学国文』9、昭五五・3）
- ⑨ 安田 章『中世辞書論考』（昭五八、清文堂）